

拙者親方と申すは、お立ち合いの内に御存知のお方もござりましようが、お江戸を發つて一十里上方、相州小田原、一色町をお過ぎなされて、青物町を登りへお出でなさるれば、欄干橋虎屋藤右衛門、只今は剃髪致して、円斎と名乗りまする。元朝より大晦日まで、御手に入れまする此の薬は、昔、ちんの国の唐人、外郎という人、わが朝へ來たり、帝へ参内の折から、此の薬を深く籠め置き、用ゆる時は一粒ずつ、冠の隙間より取り出す。依つて其の名を帝より、透頂香と賜る。即ち文字には、頂、透く、香と書きて、とうちんこうと申す。只今は此の薬、殊の外世上に弘まり、方々に似看板を出し、イヤ小田原の、灰俵の、さん俵の、炭俵のと、色々に申せども、平仮名を以てういろうと致したは、親方円斎ばかり。若しやお立合の内に、熱海か塔の沢へ湯治にお出なさるるか、又は伊勢御参宮の折からは、必ず門違いなされまするな。お登りならば右の方、

外郎売の台詞



《このページの原典》

『花江都歌舞妓年代記（はなのえど かぶきねんだいき）』
卷之一・初編二 烏亭焉馬 著、松高斎春亭 画
天保 12 年・1841 年刊（国立国会図書館所蔵）

お下りなれば左側、八方が八棟、表が三つ棟玉堂造、破風には菊に桐の臺の御紋を御赦免あつて、系図正しき薬で御座る。イヤ最前より家名の自慢ばかり申しても、御存知ない方には、正身の胡椒の丸呑、白川夜船。さらば一粒食べかけて、その気味合をお目に懸けましよう。先ず此の薬を、かように一粒舌の上へ乗せまして、腹内へ納ますると、イヤどうもいえぬは、胃肝肺肝が健やかに成つて、薰風咽より来り、口中微涼を生ずるが如し。魚、鳥、木の子、麵類の食い合わせ、其の外、万病速効あること神の如し。扱、此の薬、第一の奇妙には、舌の廻ることが錢独樂が裸足で逃る。ひよつと舌が廻り出すと、矢も楯も堪らぬじや。そりやそりやそりや、そりやそりや、廻つて來たわ、廻つて來るわ。アワヤ咽、サタラナ舌に、力牙サ歯音。ハマの二つは唇の輕重開口爽かに、あかきたな、はまやらわ。おこととの、ほもよろを。一つペギへぎに、へぎほし、はじかみ。盆豆、盆米、盆牛蒡。摘蓼、摘豆、摘山椒。書写山の社僧正。小米の生嶋、小米の生嶋、こん小米のこ生嶋。繻子縫繻子、繻子縫珍。親も嘉兵衛、子も嘉兵衛、親嘉兵衛子嘉兵衛、子嘉兵衛親嘉兵衛。古栗の木の古切口。雨合羽が番合羽か。貴様の脚絆も皮脚絆、我等が脚絆も皮脚絆。尻皮袴のしつ綻びを、三針針長にちよと縫て、縫てちよとぶん出せ。河原撫子野石竹。野良如來野良如來、三野良如來に六野良如來。一寸のお小仏にお蹴躊躇きやるな。細溝に泥鰌によろり。立ちよ、茶立ちよ。青竹茶筅でお茶ちやと立ちや。来るわ来るわ何が来る、高野の山のおこけら小僧、狸百疋、箸百膳、天目百杯、棒八百本。武具馬具、武具馬具、三武具馬具、合わせて武具馬具六武具馬具。菊栗、菊栗、三菊栗、合わせて菊栗六菊栗。麦ごみ、麦ごみ、三麦ごみ、合わせて麦ごみ六麦ごみ。あの長押の長薙刀は、誰が長薙刀ぞ。向うの胡麻殻は荏の胡麻殻か真胡麻殻か、あれこそ

ほんまごまがら 本の真胡麻殻。がらびいがらびい風車。おきやがれ小法師、おきやがれ小法師。
 ゆんべ 昨夜もこぼして、又こぼした。たあふぼぼ、たあふぼぼ、ちりから、ちりから、
 また つつたつぼ。たぼたぼ、干蛸落たら煮て食を。煮ても焼いても食われぬ物は、五徳、
 ゆだ てつきゅう 鉄弓、金熊童子に、石熊、石持、虎熊、虎鱈。中にも東寺の羅生門には、茨木
 さだ どうじ 童子が、うで栗五合、掴んでおむしやる。かの頬光の膝元去らず。鮒、金柑、椎茸、
 さだ ごだん 定めて後段な、蕎麦切り、素麺、餌飴か、愚鈍な、こ新発知。小棚のこ下に、小桶
 みそ あ にこ味噌がこ有るぞ。こ杓子こ持つて、こ掬てこ寄せ。おつと合点だ、心得たん
 ぼの、川崎、神奈川、程ヶ谷、戸塚は走つて行けば、灸を擦りむく、三里ばか
 りか、藤沢、平塚、大磯がしや、小磯の宿を七つ起きして、早天そうそう、
 そしゆうおだわらとうちんこう 相州小田原透頂香。隠れござらぬ、貴賤群衆の花のお江戸の花ういろう。あれ、
 はな み あの花を見て、お心をお和らぎやつとい。産子、這子に至るまで、此のうい
 ろうの御評判、御存知ないとは申されまいまいつぶり、角出せ、棒出せ、ぼうぼ
 まゆ う眉に、臼、杵、擂鉢、ばちばち、ぐわらぐわらぐわら（がらがらがら）と、羽目
 はず を外して今日御出の 何も様に、上ねば成らぬ、売ねば成らぬと、息せい引つ
 とうほうせかい くすり もとじ ぱり、東方世界の薬の元締め、薬師如来も上覧あれど、
 うやま はめ ホホ 敬つて、ういろうはいらつしやりませぬか。

一ページ本文六行目で、『用ゆる時は』と表記した部分は、「用ゆる時々」とする資料も見られます。『花江都歌舞妓年代記』（以下、『年代記』）で使われている文字は『用の付』で、踊り字の『々（同の字点）』が使われているようにも見えますが、これは、変体仮名で「は」に使われる文字の一つの、「と」の形ではないかと思われます。『年代記』では、「何々は」の場合、「又ハ假勢ひふゑ宮」（または伊勢：）などと「ハ」の文字が多用されていますが、「此君を今」（この君は今）のように、「盤」の字を崩した「と」に似た字も使われおり、また、一文字の繰り返しには「々（同の字点）」ではなく、「人々足を」（人々これを）のように「と（二の字点）」が多いようにも見受けられるため、ここでは、『用の付』は、『用ゆる時は』としました。

一ページ本文六行目の『冠』の読みは、「かんむり」とする資料が見られます、ここでは「かぶり」としました。「冠」は、「かがふり」「かがほり」「こうぶり」「かむり」「かぶり」などともされ、『年代記』では『冠のそなわ』（かぶりのすきま）と、振り仮名が「かぶり」となっていることから、ここでは『かぶり』としました。『かむり』とする資料も見られます。

一ページ本文七行目の『透頂香』は、『年代記』では『頂透香』と表記されていますが、正しい表記の『透頂香』としました。『頂透香』は著者鳥亭さんの誤記ではないかと思われます。説明の部分は、『透 頂香』と書く、返り点での読み方と捉え、『頂、透く、香』のままとしましたが、鳥亭さんの誤記と思われる書き方からすれば、『透く、頂、香』とも考えられます。

二ページ三行目で、『臺の御紋を御赦免あつて』とした部分は、「御赦免ありて」とする資料も見られます、『年代記』では『御赦免有て』となつていて、『有』に振り仮名が振られていません。従つて、『有て』を『ありて』と取るか、『あつて』と取るかの違いかと思われますが、全九巻からなる『年代記』では、「有て」と振り仮名を振った部分は一か所のみで、「有て」とした部分は、『富三郎といろいろ有て』『御高免有て』（富三郎といろいろ有て）など少なくとも四か所ありました。その四か所の中でも、『御赦免有て』に近い表現として『御高免有て』があることなどから、ここでは『御赦免あつて』としたものです。なお、『外郎売』の初演からおよそ百年後に書かれた、十返舎一九の『続膝栗毛』に登場する「ういろううり」の口上では、『御赦免あつて』と、『ありて』となっています。

● 二ページ十行目で、『サタラナ舌に』とした部分は、『舌』とする資料も見られます。が、『年代記』では振り仮名が振られていません。これは『五音』と言われる発声を表すもので、前後に「咽・牙・齒・唇」と出て来ます。『年代記』での『五音』の読み方は音訓が混在しているため、『舌』は、『した』『ぜつ』のどちらも考えられます。が、ここでは、『年代記』に出来るだけ近い年代の文献を引くこととし、明治十六年・1883 年刊の『市川團十郎お家狂言』により『舌した』としました。なお、「サタラナ」など、片仮名とした部分は、『年代記』では平仮名ですが分かりやすくするために表記を変えました。

● 二ページ十二行目の『輕重』の読みは、「けいちょう」とする資料が見られ、現代ではそのように読むのが一般的ですが、「きょうじゅう」や「けいじゅう」とも読まれ、『年代記』では『』と、「くちびるのきやうじゅう」と振り仮名が振られていることから、ここでは『きょうじゅう』としました。

● 二ページ十三行目で、『一一つ一べき一ぎに一ぎほし一はじかみ』とした部分は、「一一つ一べき一ぎに一ぎほし一はじかみ」などとする資料も見られますが、『年代記』での表記は『』で、変体仮名で「べ」として使われる「」などの字に近い文字が見られるため、ここでは、『一一べき』としました。『年代記』では、数を数える場合「一一ツ・一一ツ」など、「ツ」の字が使われ、こゝも「一つ」と捉えることも出来ますが、続く字が「べ」となっているため『一一べき』としたものです。『年代記』では他に、「一一つ一せい一い」なども見られます。ちなみに「そ」は、「者」という字を崩した「は」と読む変体仮名で、『へぎ』の次ぎに来る『』は、「尔」という字を崩した「に」と読む変体仮名です。

● 三ページ二行目から三行目にかけての「」と「み」のくだりは、『年代記』では、「 合せて 麦一み六麦一み」となつていて、菊栗の「六」と、麦一みの「三」が欠落した形となつていて、『 六^一菊栗』や「み 麦一み 三麦一み」などを加えて形を整えました。

● 三ページ七行目で、『ちりから ちりから つ一つ一た一っぽ』とした部分は、「すつたつ一っぽ」とする資料も見られますが、『年代記』では『』となつていて、「」という字は「徒」という字を崩した「つ」と読む変体仮名であるため、こゝでは『つ一つた一っぽ』としました。ちなみに「」は「多」という字を崩した「た」と読む変体仮名で、「」は「保」という字を崩した「ほ」と読む変体仮名です。

● 三ページ九行目で、『干蛸』とした部分は、「一丁蛸」とする資料も見られますが、『年代記』では『たんぽテだこ』となっています。これを「一丁」と読めないこともあります。しかし、「欄干橋虎屋藤右衛門」の下りに出てくる「欄干」の「干」の字が『欄干らんかん』と書かれていて、「たんひだこ」と同じ表記であることから、ここでは『干蛸』としました。

平成二十一年・2009 年の、国立劇場十一月歌舞伎公演での台本では、「タツボタツボ干蛸 落ちたら煮て食うを」となつていて、十二代目團十郎は「タツボタツボ いつひだこ おちたらにくうを」と演じました。

● 三ページ十三行目で、『たんぼ』とした部分は、『年代記』では「たんひだこ」（たんぼ）としています。これは「田圃」のことと思われ、ここでは、現代の一般的な読み方の『たんぼ』としました。「ん」は、「本」の字を崩して「ほ」と読む変体仮名に半濁点を付けた文字です。

● 三ページ目、後ろから六行目の、『お心をお和らぎやつ』とした部分は、「おやわらぎや」「おやわらぎやい」などとする資料も見られますが、『年代記』での表記は『おやわらぎやひだこ』で、「や」は「也」という字を崩した「や」と読む変体仮名、「川かわ」は「川（州）」という字を崩して「つ」と読む変体仮名です。従つて、ここでは『お和らぎやつ』と表記しました。発音としては『お和らぎやわ』が近いかと思われます。この音は、続く「産子、這う子」にも掛かる「おぎやあ」という赤ん坊の泣き声とも捉えることも出来るかと思います。

平成二十一年十一月公演での十二代目團十郎は、『お心をお和らぎやアといふ』と演じました。

● 『産子這子』の『這子』は、『年代記』では旧仮名で『はふこ』としているため『ほうこ』としました。「這子人形」という言葉があります。

〔知識〕

● 三ページ目、後ろから五行目の、『産子うぶこ這子ほうこに至いたるまで』のくだりを、平成二十一年十一月公演での團十郎は、『産子うぶこ這子ほうこに玉子たまごまで』と、三つの言葉を「子」で韻を踏み演じました。

● これは、昭和五十五年・1980 年歌舞伎座初演の野口達二台本によるものです。

『花江都歌舞妓年代記』（はなのえど かぶきねんだいき） 卷之一

鳥亭焉馬(うていえんば)著 天保十二年・1841年刊(国立国会図書館所蔵)

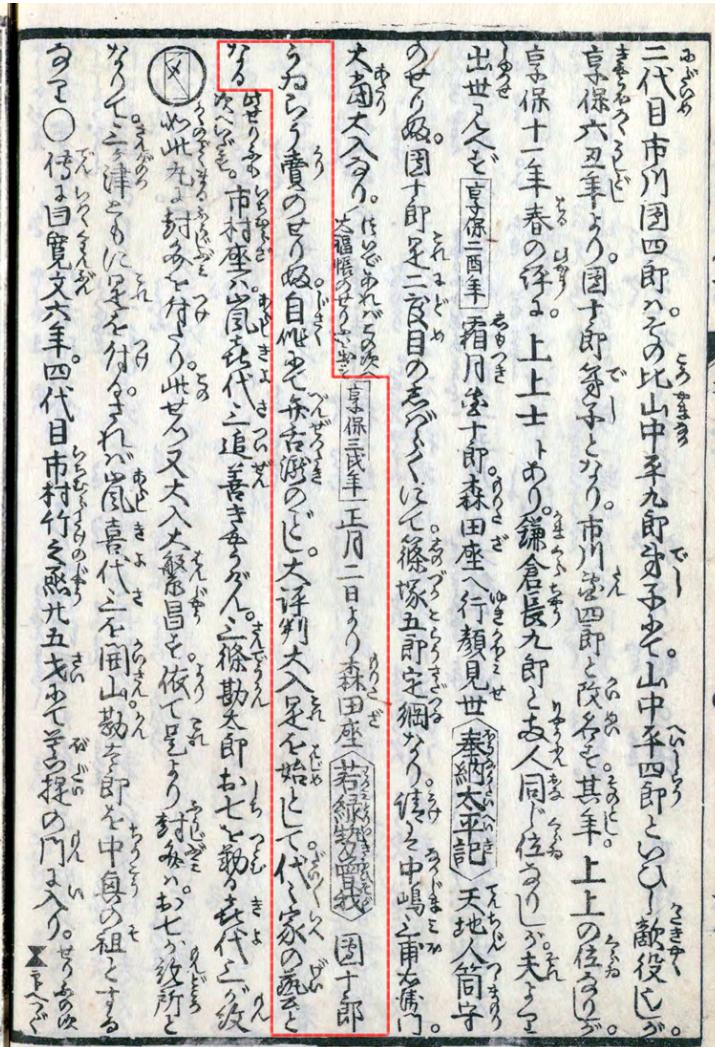
・享保三年・1718年に關する記述

享保三戌年 正月一日より 森田座

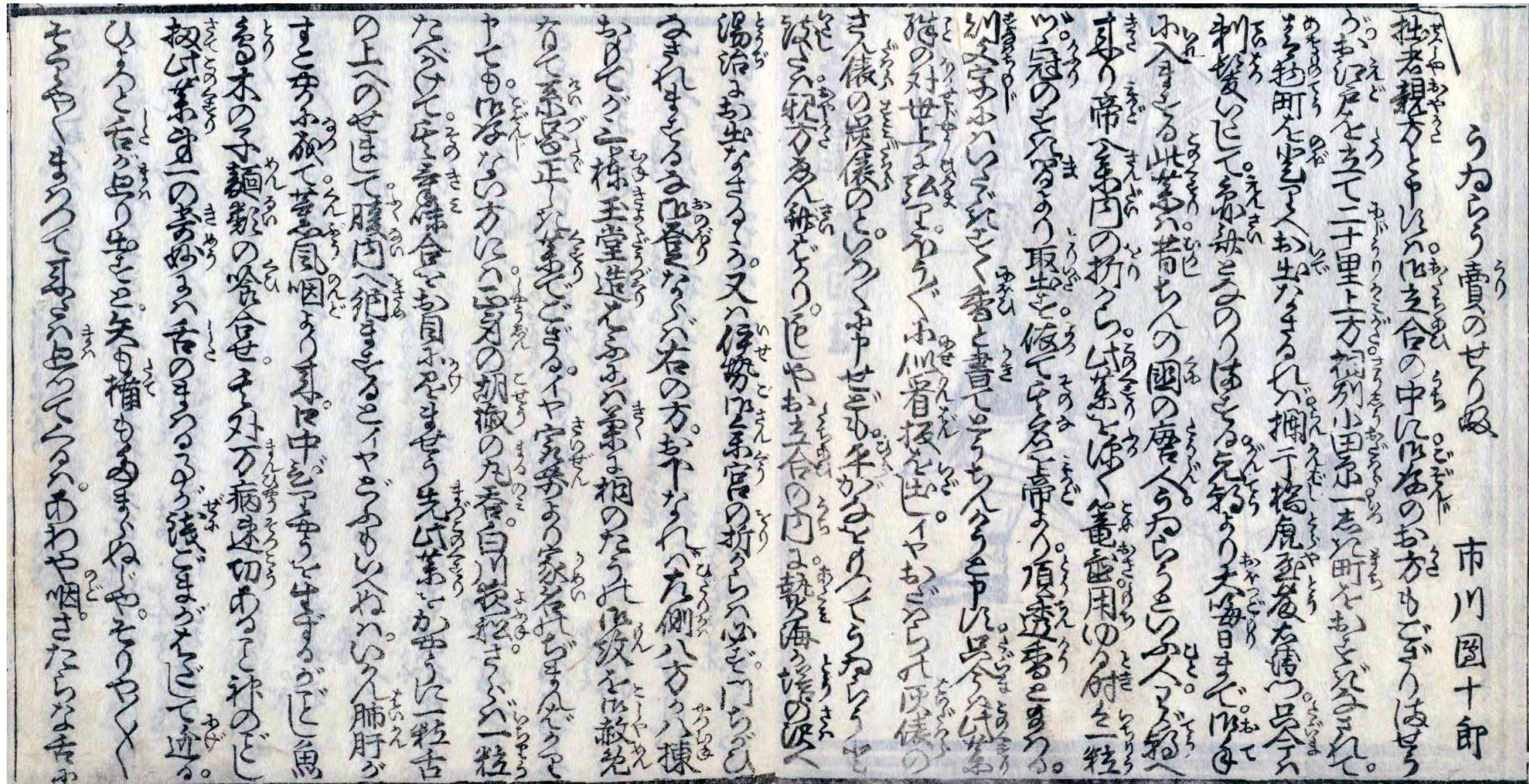
團十郎
う、ちやう荒のせりふ。自作にて准
「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそか）」

團十郎 ういろいろ売のせりふ。自作にて弁舌瀧のごとし。
平判 へいはん。二三三詫り二三三代々、ゑのき二三三。

大詰半 大刀り これを如めとして 什么 家の芸となる



・「若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）・ういろう売りのせりふ」（1／3）



*このページの、本文七行目の「頂透香(とうちんこう)」は、「透頂香」の誤記ではないかと思われるため、文字起こしでは、「透頂香」としました。

初演俳優：二代目市川團十郎 初演年：享保3年・1718年 初演劇場：江戸・森田座 原題名：若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）

*このページの、後ろから十行目の「菊栗、むぎごみ」の下りは、菊栗の「六」と、麦ごみの「三」が欠落しているのではないかと思われるため、文字起こしでは、「菊栗菊栗六菊栗」「麦ごみ麦ごみ三麦ごみ」などを加えて形を整えました。

*このページの、後ろから九行目の「長長刀(なかなぎ)」は、「長長刀(ながなぎなた)」ではないかと思われるため、文字起こしでは「ながなぎなた」としました。

・「若緑勢曾我(わかみどりいきおいそが)・ういろう売りのせりふ」(3/3)

『ういろう売』 初演俳優：二代目市川團十郎 初演年：享保 3 年・1718 年 初演劇場：江戸・森田座 原題名：若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）

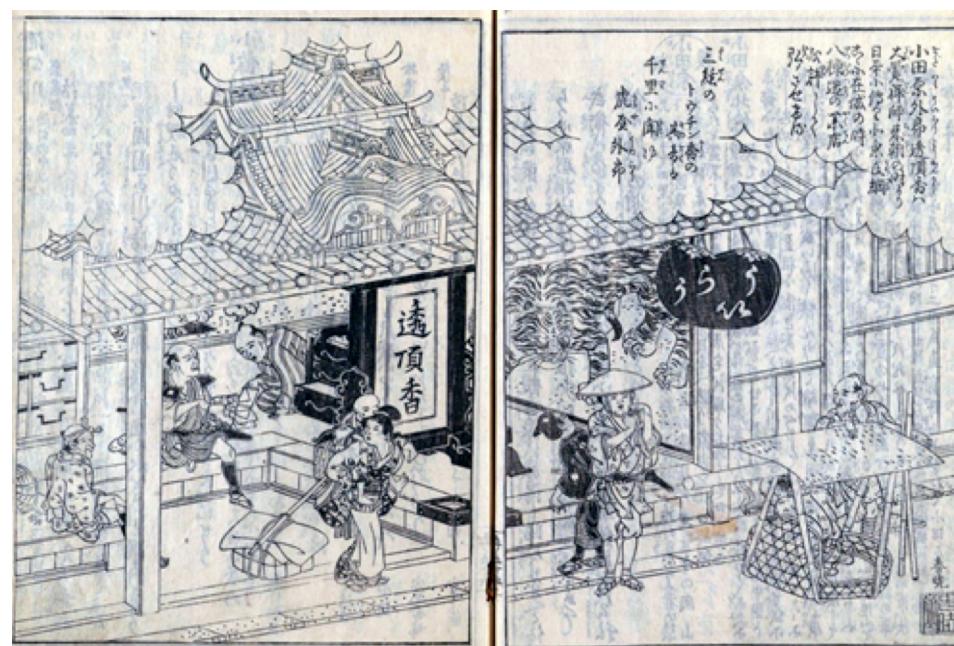


名取春仙画
『似顔畫集-創作版畫[2] 第十五』
外郎賣 市川三升
大正 14 年-昭和 2 年・1925-1927 年
(国立国会図書館所蔵)

「外郎売・ういろううり」は、享保 3 年・1718 年正月二日から、二代目市川團十郎によつて江戸・森田座で上演された『若緑勢曾我（わかみどりいきおいそが）』の中の台詞。

團十郎の自作で、『弁舌瀧のごとし。大評判で大入り』であつたとされ、これ以降、成田屋の家の代々の芸となり、歌舞伎十八番（かぶきじゅうはちばん）の演目の一つとなつた。

歌舞伎十八番は、成田屋の家の芸の集大成で、七代目團十郎が「市川流」の「歌舞妓狂言組十八番」の制定を公表したのは、天保 3 年・1832 年三月の市村座。



『東海道名所圖會』 寛政 9 年・1797 年 (国立国会図書館所蔵)

2016 年（平成 28 年）2 月
2008 年版改訂
みんなの知識 ちょっと便利帳



豊国画
『歌舞伎十八番 外郎』
「虎屋東吉 九世市川團十郎」
嘉永 5 年・1852 年
(国立国会図書館所蔵)